
魔法のサムライガール

ダルトン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法のサムライガール

【Nコード】

N5641N

【作者名】

ダルトン

【あらすじ】

【魔法先生ネギま!】の世界に

【リアルバウトハイスクール】の

サムライガール・御剣涼子の刃が煌めく!

第零話『君は流れ星』（前書き）

涼子

「内容に期待しない方が良いわよ！」

作者

「んな事言うな！」

涼子

「うっさい！唸れ＜夜叉姫＞！！」

どげし

作者

「サボテンに花が…」

ドサツ…

第零話『君は流れ星』

あたしの眼前に、何か変な奴が居る。

――170センチ以上のすらりとした長身

長い髪をやや高い位置からポニーテールに結った、可愛や美人と言
うよりハンサムといった顔立ちの、セーラー服の女子高生は、現在
自分の置かれた状況に困惑していた。――

神様

「はじめましてく御剣涼子くさん。
私は、神様です。どうぞ宜しく。」

ソイツが、あたしに向かって
話し掛け――って

涼子

「はあ！？神様！？
何言ってるのよ、あんた！？」

神様

「何だと言われても、天界で神様なんだからしょうがないです。」

涼子

「……ひょっとしてあたし死んだ？」

神様

「いえいえ死んでいませんよ。
生きながら此処に來ています。
原作では何回も死んでましたけどね。」

涼子

「メタな発言するんじゃないわよ！」

神様

「まあまあ、落ち着いて。
ミ〇ミ〇でも飲んで下さい。」

差し出されたミ〇ミ〇を飲むと
気分が落ち着いた。流石はミ――

涼子

「そおおおおおい！！
何ら接点も無い他の作者様のネタを
臆面もなくパクるなあああ！！
バカなの！？死ぬの！？」

神様

「私の目的なのですが――」

涼子

「サクッと話しを進めんな！
一言お詫びぐらい入れなさいよ！」

ごめんなさい。

神様

「貴女には、クロスオーバーで【魔法先生ネギま!】の世界に行ってもらいます。」

涼子

「なぬ!？ちょっと、何よそれ!？
何であたしがそんな所に行かきゃなんないのよ!？」

神様

「なんとなく？」

涼子

「何ゆえ疑問系!？
大体、あれって確か中学生が主な登場人物じゃない！
高校生のあたしに中学生になれたの!？
大作君じゃあるまいし冗談じゃないわ!!
そもそも設定年代が違うわよ!!」

神様

「其処は心配しないで。

先ずはく魔法世界＞での大戦に参加して下さい。」

涼子

「結構ベタな出だしね!？
こういうクロスオーバーって何か尤もらしい理由を付けて行くもん
でしょうが!？」

他には“死んだオリ主が転生”とか!」

もうメタとかどうでも良いわ！

神様

「理由付けとかオリ主とか考えるのが面倒くて。」

……あんた……よくそんなんで小説にしようとするわね？

涼子

「……まあ良いわ。どうせ反論するだけ無駄みたいだし。それに、強い相手と戦えるってのも悪くないわ。」

神様

「それでこそ、サムライガール！」

涼子

「その呼び方は止めて！」

神様

「でもまあ、今のままでは実力不足なので、チート能力をあげます。」

涼子

「実力不足で悪かったわね！？
で！どんな能力付ける気よ！？」

神様

「次ページ参照。」

これが《スーパー・御剣涼子》だ！

身体能力

【不老】

【南雲慶一郎と同等の身体能力】

【＜神威の拳＞八属性全て使用可能】

【＜月の神威＞での気と魔力の吸収】

【＜月の眼＞の完全制御】

武器類

【武器1…日本刀に変わる魔法の木刀】

【武器2…棒手裏剣】

【武器3…飛天流の宝刀＜綺＞あや】

【武器4…涼子が原作で使用了各武器】

道具

【鰐眼帯】

【刀袋】

【ホバー・バイク】

戦闘技術

【完全版＜飛天流剣術＞】

【＜コマンド・ゼロ＞】

その他

【固有結界＜無限の木刀製＞】

【王の財宝】

【コスチューム・チェンジ】

【オイスタールの魔法】

神様

「ネタバレ注意。」

涼子

「……………むちゃくちゃだ。」

神様

「多分これでも東方流玄には及ばないだろうけどね。」

涼子

「あの男どんだけチートなの!?!」

神様

「とりあえず、あっちの世界にいく前に能力の使い方を実習しよう。」

練習後

涼子は＜神威の拳＞で＜神氣＞の二属性同時発動を覚えた。

＜神威の拳＞と＜飛天流剣術＞を合わせた剣技、体術を覚えた。

＜無限の木刀製＞で、原作小説や漫画の表紙の色々な木刀や＜風林火山＞＜阿修羅＞＜正宗＞とか出した。

<オイスタールの魔法>は……
よく分からなかった。

涼子

「……………怖いわね？」

神様

「凄いですね。でもやはり指パッチンで
核爆発を起こせる東方流玄には……。」

涼子

「……………とんでもないわ。」

神様

「さて、そろそろ逝きましょう。」

スラッ……

涼子

「え！？字が違うんじゃない！？
それに……そのバットは、ソルバニアの魔王の……………」

神様

「星になるがよい！」

カキーン！

あたしは、一本足打法でのフルスイングで
かつ飛ばされた先に有った――

――<穴>に落ちた。

涼子

「テンプレとの合わせ技!？」

第零話『君は流れ星』（後書き）

涼子

「あとがきよ！起きて締めなさい！」

作者

「……………我が眠りを妨げ―」

チャキ《涼子が刀の鯉口を切る音》

作者

「みなさん！感想やアドバイスをお願いします！！」

第一話『剣の舞』（前書き）

作者

「約3日でユニークが150人を越えたぞ！」

涼子

「まじで!?!」

作者

「まじだ! お気に入り登録も一件あるぞ! ありがたやありがたや。」

涼子

「見捨てられないようにね!」

作者

「おう!」

第一話『剣の舞』

魔法世界に降り立った御剣涼子は――

町娘

『――せめて御名前を……。』

涼子

『ふ……名乗る程の者では御座らぬ。』

と、そんな感じで困っている人達を助けたり。

悪人

『てめらやっちまえ！』

涼子

『冥途の土産に、円月殺法、御覧に入れよう。』

と、こんな感じで山賊団や盗賊団を壊滅させたり。

魔獣

『アングァアアアア！』

涼子

『――＜天覇龍凰“剣”＞！！』

と、あんな感じで魔獣退治をしたりと
暫くの間、大胆不敵、電光石火で

粹に暴れまわっていた。

そして現在――

《ササササササササササ！》

涼子は、学ラン姿で遠い星の白夜のような風になり荒野を切り裂き
駆け抜けていた。ヒュルル♪

涼子

「こんな場所で鍋料理の香り！
コレは“あの状況”に間違いない！
ならば！この香りの先に“彼等”が
居るはず！！」

香りの元に向かい速度をあげる涼子。

ところで涼子さんや、あの＜穴＞から
落ちた時はどうしたんですか？

涼子

「え？ ああ、あの時は
＜風＞の＜神威の拳＞を使って
空を飛んだのよ！」

なるほど。

涼子

「てか、そんな話はこんなところで質問にせずストーリーに入れて書け！」

気をつけまゝす

『お食事中失礼〜〜ッ』

“あの状況”

野外で鍋を囲んでいた＜紅き翼＞は
放浪の傭兵剣士＜ジャック・ラカン＞の
襲撃を受けた！

吹っ飛ぶ鍋料理！だが！

＜紅き翼＞の詠春以外のメンバーは
飛び散る具をキャッチして救いあげ
鍋將軍・詠春は鍋を頭に装着した！

ナギ

「…何かナレーションが無駄にかっこよくね？」

ゼクト

「詠春が吹っ飛んだ鍋を被っただけだというのにな…。」

詠春

「…フ…食べ物で粗末にする者は…」

キレた詠春が、ラカンに斬りかかるその時―

《ヒュッ！》

詠春とラカン、2人の間をく斬撃が通り抜けた！

詠春・ラカン

「誰だ!?」

『失礼致した!』

詠春とラカンだけでなく全員が声の主に目を向けると。長い髪をやや高い位置からポニーテールに結い。朱色の着物。紺色の袴。草履に白い足袋を履き。

凜とした顔立ち。右目に顴眼帯。

右手に木刀を持つ。く侍が居た。

人物の名は――く御剣涼子く。

くサムライガールくとかく紅き翼くがついに会った瞬間である。

涼子

「(…くっ…鍋には間に合わなかったか…)

く紅き翼くの方々とお見受け致す！

拙者の名は、御剣涼子！

皆様方に、一手御指南頂きたい！」

ナギ

「…今のはどういう意味なんだ？」

アル

「彼女は“私達全員と戦いたい”という意味です。」

ナギ

「へえ…おもしれえ！…って、居たのかアル？」

アル

「居ましたよ？」

ナギ

「涼子っていったな？俺が相手に——」

詠春

「待て、ナギ！」

ナギ

「なんだよ詠春？」

詠春

「…俺が相手をする。彼女を見ていると…剣士としての血が騒ぐ！」

ナギ

「…ちえっ、仕方ねえな…。」

けど、そっちの筋肉ダルマはどうすんだ詠春？」

詠春

「…そうだな。ナギ…お前がやるか？」

ナギ

「良いぜ！おいジャック！

俺と喧嘩しようぜ！」

ラカン

「ああ良いぜ！」

涼子と詠春、ナギとラカンが反対方向へ別れて、それぞれ向かい合う。

く涼子VS詠春く

詠春

「武器はその木刀だけなのか？」

涼子

「木刀では不満で御座るかな？…では。」

涼子の木刀が一振りの、鞘と柄と鍔の黒い日本刀に変化する。

詠春

「何！？」

抜刀して、正眼に構える涼子。

涼子

「――＜飛天流＞御劍涼子、いざ参る！」

詠春

「…くっ…＜神鳴流＞青山詠春、受けて立つ！」

虚をつかれた形になった詠春も刀を構える。

《ヒュン！》

詠春

「うおっ!?!」

一瞬で間合いを詰めた涼子の上段斬り。
紙一重で避ける詠春。

詠春

「(速い!…いや…強い!!)」

《キインキインキインキイン》

十数分経過、涼子と詠春の斬り結ぶ刃が
音を奏でている。

アル

「…まるで“剣の舞”ですね。」

ゼクト

「…そうじゃのう。」

見惚れる2人。

《ザザッ》

一旦間合いをとる両者。共に顔が笑っている。

詠春

「――＜斬空閃＞！」

涼子

「――＜残月＞！」

《パァン》

両者の＜気＞の斬撃が空中で激突し弾ける。

詠春

「やるな！」

涼子

「詠春殿！本気の＜神鳴流＞でお願い致す！」

詠春

「！：！」

涼子の発言に、狂気の目になる詠春。

詠春

「…ふふふ…良かろう…。」

詠春の刀の切っ先に<雷>が宿る。

詠春

「<極大・雷鳴剣>!!」

愛刀<夕風>を振り下ろし

詠春の雷撃が涼子に襲いかかろうとする。

涼子は雷撃に刀を向ける。

刀身が<雷>を吸収した。

詠春

「なっ!?!」

気と魔力を吸収出来る、涼子の<月>属性の<神威の拳>。

涼子

「お返し致す!」

吸収した雷撃を纏わせた刀を袈裟斬りに振りきる。

一直線に走る巨大な<雷>が詠春を包み込んだ。

詠春

「ぐああああああつ!!」

アル・ゼクト
「詠春!!」

第一話『剣の舞』（後書き）

作者

「涼子さんや、今回の感想は？」

涼子

「……鍋を食べたかった。」

作者

「そこかい！」

涼子

「じゃあ、サブタイに失敗するな！
一回消したでしょ！」

作者

「……ごめんなさい。」

第二話『戦いおわって』（前書き）

作者

「PVが1000を！ユニークが300を越えた！」

涼子

「感想も来たわね！あたしの活躍に期待してるって！」

作者

「がんばれよ！」

涼子

「それは、あんた次第よ！」

作者

「あっ、そうか！」

第二話『戦いおわって』

『詠春!!』

くナギVSラカンく

ラカン

「…向こうは終わったみたいだぜ？」

ナギ

「…ああ…。」

共に“無敵”と呼ばれる2人は
既に何度も攻防を繰り返していた。

ナギ

「く千の雷く!!!!」

ラカン

「く気合い防御く!!!!」



詠春

「……うん…はっ！」

アル

「目が覚めましたか詠春。」

詠春

「か…彼女は!？」

アル

「そこに居ますよ。」

詠春

「へ？」

アルが顔を向けた方向を見ると、ゼクトとセーラー服姿の女の子が鍋料理をパクついていた。

女の子が詠春達の視線に気付く。

涼子

「あっ、おじゃましてるわよ♪」

ゼクト

「おお、起きたか詠春。」

詠春

「え?…え〜と?」

ガラッと雰囲気が変わった涼子に戸惑う詠春。顴眼帯も外してある。

アル

「間違いなく、御剣涼子さんですよ。」

詠春

「……これは…どういう状況なんだ？」

アル

「カクカクシカジカです。」

詠春

「…そ…そうか…。」

ん？ナギはどうした？」

アル

「まだバトルをしています。」

くナギVSラカン

戦闘開始から十三時間後く

ラカン

「…フ…フフ…やるじゃねえか小僧。」

ナギ

「あんたこそな。」

『終わったみたいね？』

涼子が2人に声をかける。

アル、ゼクト、詠春も一緒に居る。

ラカン

「おお!？」

ナギ

「涼子!？あつ、詠春無事か？」

詠春

「…ああ…なんとかな…。」

涼子

「…しかし凄い焼け野原ね…。」

涼子が辺りを見回して惨状について述べる。

そこらなんやかんや会話があって――

ゼクト

「ほう、最近噂の“正義の女剣士”とは涼子の事じゃったのか。」

ナギ

「どんな噂なんだ？」

アル

「弱きを助け悪を討つ流浪の女剣士がいると専らの噂ですよ。」

ラカン

「俺も魔獣退治の仕事に先回りされたぞ。」

涼子

「そうなの？悪かったわね。」

ラカン

「フ…まあ良いさ。」

ナギ

「よし！気に入ったぜ2人共！

涼子！ジャック！

俺達の仲間にならねえか！？」

詠春

「お…おいナギ、いきなり何を…！？」

涼子

「あたしは構わないわよ！」

ラカン

「俺様もだ！」

サムズアップで答える2人。

御剣涼子とジャック・ラカンが
＜紅き翼＞の仲間になった！

数日後

ナギ

「今日の料理当番て誰だ？」

涼子

「あたしよ？」

ナギ・ラカン

「げげっ!？」

涼子

「何よ、そのリアクション!？」

アル

「…食材から“食品サンプル”を錬成する腕前ですからね。」

ゼクト

「うむ…あのような“錬金術”は初めて見たのじゃ。」

御剣涼子は料理の錬金術師の二つ名を手に入れた！

詠春

「……涼子が当番の時は俺が作ろう。」



とある水辺

涼子

「んん！気持ち良いわぁ♪」

涼子沐浴中。

《カサカサカサカサ》

茂みの中、地を這う二つの影。

ナギ

「…なあ…ジャック…本当に行く気か？」

ラカン

「入浴中の女体を拝みに行くのは、男として当然の事だ！」

ナギ

「…はぁ…そんなもんか？」

ラカン

「おっ、着いたぜ♪」

ナギ

「…お…おう。」

そっつと茂みの間から覗き込む。

《カツ！》

2人の間を一本のく棒手裏剣>が通り抜け後ろの木に突き刺さる。

ナギ・ラカン

「「!?!」」

涼子

「うふふ♪2人共、何をしているのかしら？」

2人の前に、セーラー服を着た“夜叉”が立っていた。

ラカン

「…さ…散歩だぜ？」

ナギ

「…そ…その通りだぜ涼子？」

冷や汗をダラダラ流しながら言い逃れようとする2人。

涼子

「…フ…素直に謝れば許してあげたのに…。」

———<無限の木刀製>

周りの景色が月面の様な荒野に変わり

大地に<聖地>より生まれし

<伝説の十聖剣>が突き刺さる。

涼子

「あんた達には“OSIOKI”が必要みたいね？」

ナギ・ラカン

「「あああああああああ！！」」

それから。

涼子

「“念話”での連絡ありがとう、アル。」

アル

「いえいえ、どう致しまして。」

ゼクトと詠春は

＜十聖剣＞の能力フルコースをくらい
野に打ち捨てられた2人を回収に向かい
発見する。

ゼクト・詠春

「「……アホか。」」

嘆息する2人。

涼子

「野獣、死すべし！」

第二話『戦いおわって』（後書き）

涼子

「鍋料理、美味しかったわ♪」

作者

「それは良かったね？」

涼子

「ところで何、あの後半部分？」

作者

「いやあ…＜赤き翼＞入りまでが、あまりに短いから…。」

涼子

「ナギラカン・バトルをしっかりと書けば良かったんじゃない？」

作者

「あっはっはっはっはっはっ！」

涼子

「笑って誤魔化すなあああああ！」

第三話『影法師』（前書き）

作者

「…やっと思けた。」

涼子

「かなり難産だったわね？」

作者

「特に説明的な文がね。」

今回は、あのキャラが目立ちます！」

第二話 『影法師』

ナギとラカンが＜仮契約＞をした。

ナギ

「早くアーティ・ファクトみせろよ！」

ラカン

「おっしや！——来たれ！！」

ラカンのもつカードが言葉に反応して光り、大剣へと変わる。

ラカン

「コイツが俺様のアーティ・ファクトか。」

アル

「変幻自在に姿を変える武具く千の顔を持つ英雄」ですね。」



ゼクト

「涼子はナギとく仮契約＞せんのか？」

涼子

「あたしの場合、大して意味無いんじゃない？」

詠春

「確かに武器も技もとんでもないからな。」

ナギ

「…あの十本の木刀はヤバかった。」

ラカン

「＜月の神威＞とか言ったか？」

魔力や気を吸収なんて反則だろ？」

涼子

「別に良いでしょ？」

無然とする涼子。

アル

「ですが全く無意味という訳では有りませんよ？」

涼子

「どんな意味が有るのよ？」

ゼクト

「＜魔力＞じゃなアル？」

アル

「その通りです。涼子さん自身には魔力がからつきしですが＜仮契約＞をする事によって主から＜魔力＞が流れ込みます。」

涼子へのチート能力に魔力はあげてません。

涼子

「ん？…別に今すぐには必要ないわ。」

ナギ

『何かあったら直ぐに呼べよ?』

涼子

『了解。』

涼子、皆と離れた場所で一人、木刀を振って鍛錬中。

涼子

「!?!」

右目に宿る＜月の眼＞の未来視により
とっさにその場から飛び退く涼子。

《ドズッ!》

黒い槍のようなものが先程迄涼子の居た場所に突き刺さる。

『ほう…かわしたか?』

涼子

「何奴!?!」

黒い影のような人物が姿を現す。

『私は帝国軍ボスポラスの＜影使い＞カゲタロウ。
故あって貴様達＜紅き翼＞全員の命を頂く。』

影を鞭のように振り回しながら言う。

涼子

「…大層な自信ね？」

カゲタロウ

「少なくとも過信では無いつもりだ。」

《ズドドッ！》

＜月の眼＞による未来視で

影の槍の連続攻撃をかわす涼子。

カゲタロウ

「…私の攻撃に三撃以上もつとは。

だが避けてばかりでは私には勝てん。」

涼子

「そんな事は百も承知よ！——＜隼＞！」

涼子が木刀を振り抜く。

敵に向かって一直線に矢の様に進む不可視の＜風＞の斬撃がカゲタロウの顔を掠めた。

カゲタロウ

「ぬっ！？」

涼子が鍛錬していた、ネタ剣術其の一
＜風の神威＞を用いた＜浮羽神風流＞。

涼子

「今度はこっちから行くわよ！

——>疾風迅雷>!!」

<神威の拳>二属性同時発動。

涼子は<風>と<雷>の<神気>を纏い
超高速で移動しカゲタロウに接近する。

カゲタロウ

「何と!？」

<闇の魔法>と違いリスクは無い。

涼子

「<九頭龍閃>!!」

ネタ剣術其の二<飛天御剣流>
神速で放つ九つ同時の斬撃が影を斬り裂き
撃ち抜いた。

カゲタロウ

「ぬおおおおおおお!!」

<<ガッ>>

崩れ倒れようとするのを踏みとどまるカゲタロウ。

涼子

「…あんだ、強いわね。」

カゲタロウ

「……素直に受け取っておこう。」

涼子

「私達の仲間になる気ない？」

カゲタロウ

「!?!?…正気か？私は帝国軍だぞ？」

涼子

「ナギが言ってたんだけど、この戦争どこかおかしいそうよ（ホントはこの世界に来る前に知ってるんだけどね）。」

カゲタロウ

「…どういうことだ？」

涼子

「ん…そうね、例えば穏健派だった国の重鎮が偽物とすり替わって急に主戦論を唱えたりとか——」

カゲタロウ

「!?!…あ…有るぞ…心当たりが!?!」

涼子

「誰が心当たりなの？（これは本当に知らないわよ!?!?）」

絞り出す様な声で言う。

カゲタロウ

「――＜皇帝陛下＞だ！」

＜ヘラス帝国皇帝＞は争いを好まない
穏やかな性格で国民から慕われていた。
奴隷制度についても廃止を考えていた。

だが、数年前から人が変わった様に
帝国にとっての聖地＜オスティア＞を
奪還すべく国民を戦争に駆り立てた。

カゲタロウ

「――と言う訳だ。」

アル

「その話なら聞いた事がありますね。
真偽の程が分からなかったのですが…。」

ラカン

「結局、奴隷の解放なんて出来なかったけどな。」

詠春

「…最初の小競り合いすら仕組みられたものかも知れないな。」

涼子はカゲタロウを＜紅き翼＞と引き合わせた。
ナギ達は認識阻害をかけて野で会話をしていた。
カゲタロウの怪我も治療済み。

ナギ

「そんな事より涼子!!」

何かあれば呼べって言っただろ!!」

涼子

「…べ…別に大丈夫だったから良いでしょう!?!」

ナギ

「良くねえ!心配させんな!!」

皆が初めて見る態度のナギ。

アル

「(おやおや)」

ゼクト

「(これは)」

詠春

「(…まさか)」

ラカン

「(ふゝん♪)」

カゲタロウ

「(…………)」

涼子

「…わ…悪かったわよ。」

カゲタロウは以前から皇帝の様変わりに違和感を感じていた。だが帝国民として

聖地奪還の理想は理解出来る。不敬と思いその違和感について考えないようにしていた。

アル

「カゲタロウさんお願いします。」

帝国に戻って、その闇を探って頂けませんか？」

ゼクト

「出来れば皇室をの。」

カゲタロウ

「…心得た（皇室に接触するなら第三皇女だな）。」

カゲタロウは帝国に戻って行った。

第三話『影法師』（後書き）

作者

「安産スッポン！安産スッポン！安産スッポン！」

涼子

「タ〇リか！？」

作者

「だって今後更に難産になりそうなんだもん！
作品の安産祈願くらいしときたい！」

涼子

「……御利益あると良いわね？」

第四話『夜空の星』（前書き）

作者

「いや参った。話数を間違えたや。」

涼子

「第二話の次が第四話だったものね？」

作者

「すまん、直しました。」

ああ、それと今回は涼子の出番ないから。」

涼子

「ええええええええええっ!？」

第四話『夜空の星』

帝国軍は大規模転移魔法を用いて
大兵力を送り込み、連合軍の巨大要塞
〈グレートブリッジ〉を陥落させた。

連合の喉元に喰らいついたのは確かだが
同時にそれは、戦力が敵中に孤立したと
言えなくも無い。



〈ヘラス帝国・北方領土・庭園〉

一人夜空の星を見上げる幼〈ベキ!〉少女。

『(…拳が痛いじゃ) ……父上は、いったい如何してしまわれた
のじゃ?』

数年前、ヘラス帝国第三皇女〈テオドラ〉は、慈愛に満ちた仁君か
ら一転して狂信的に聖地奪還の理想を掲げて国民を戦争に駆り出す
帝国の皇帝であり父親の変貌ぶりに本能的な危機感で北方に逃げ出
した。

テオドラ

「……優しかった、あの父上が…あれではまるで――」

何度も繰り返して来た自問自答。

『＜別人＞——ですか？』

テオドラ

「！？…だ…誰じゃ！？」

狼狽し身構えるテオドラ。

黒い影のような人物が現れ、目の前で恭しく片膝を付く。

『失礼致しました、テオドラ皇女殿下。』

私はボスポラスのカゲタロウと申します。

御安心を、危害を加えるつもりなどはありません。仮にそのつもりならば声など掛けません。』

テオドラ

「…む…そ…そうか…信じるとしよう。

…では、カゲタロウとやら…先程の言はどういう意味じゃ？」

カゲタロウ

「殿下のお気付きの通りの意味にございます。

皇帝陛下は変わられた。＜御心＞が——ではなく
＜本物＞から＜偽物＞に！」

テオドラ

「————貴様アアアッ！——！」

父上の心が変わったのであるなら
説得などで元の優しかった父上に戻るやも知れぬ。
だが、全くの別人が父上になりすましておるのであれば――

テオドラ

「貴様！証拠はあるのか！？」

父上…皇帝陛下を偽物呼ばわりなど…！」

カゲタロウ

「御座いません。」

テオドラ

「なんじゃと！？」

『何事でございますかテオドラ様！？』

テオドラの大声に、侍女と衛兵が駆け付け、カゲタロウを見る。

侍女

「な！？…く…曲者…！」

衛兵

「おのれ！テオドラ様お退がりを！」

カゲタロウに武器と敵意を向ける。

テオドラ

「静まれ…！この者は敵ではない…！」

カゲタロウ・侍女・衛兵

「「「!!」」」」

テオドラが一喝した。

侍女

「…テ…テオドラ様？」

衛兵

「…で…では何者なのですか!？」

テオドラ

「この者は……………＜御庭番＞じゃ!!」

侍女・衛兵

「「は？」」

2人は目が点になった。

侍女

「…テオドラ様?今思い付きませんでした?」

衛兵

「…答えに、少し間がありましたよね?」

テオドラ

「き…気のせいじゃろう?」

侍女

「それに、このような人物は今迄見た事が有りませんか？」

衛兵

「私もです。」

テオドラ

「そ…それは仕方がないのじゃ！

人知れず妾を守るのが任務じゃからな！」

カゲタロウ

「御二方には、お初にお目にかかります。

“死して屍拾う者無し” <テオドラ様付き御庭番カゲタロウ>に御座います。

お見知り置き、及び、内密にお願い致します。」

テオに合わせて、恭しく名乗るカゲ。

侍女・衛兵

「「いやそれ、隠○同心だから!!」」

テオドラ

「そんなワケじゃからな（なっとくするのじゃ）？」

目が怖い。

侍女・衛兵

「「…り…了解しました。」」

カゲタロウがテオドラの<御庭番>になりました。



夜空の星の下、テオドラとカゲタロウは2人で話をしていた。

カゲタロウ

「…何故、私をお側に？」

テオドラ

「お主を“信じる”と言ったじやろう？」

それにく御庭番はお主も認めたではないか？」

カゲタロウ

「……フ…そうでしたな。」

このカゲタロウ、テオドラ様の為に命を賭けます。」

テオドラ

「……死ぬでないぞ？」

カゲタロウ

「！………御意。」

第四話『夜空の星』（後書き）

涼子

「…………あたし、主人公よね？」

作者

「バトル作品で主人公の出ない回なんてザラじゃん？」

涼子

「ふん！別にいいわよ！

次回は、ギガント活躍してやるわ！！」

作者

「しょーたん！？」

第五話『黒い戦争』（前書き）

作者

「PVが5000をユニークが1000を越えた！」

涼子

「わー！ どんどん！ パフパフ！」

作者

「涼子さんや、キャラ壊れてないかい？」

涼子

「何を今更？」

作者

「開き直られてる！？」

第五話『黒い戦争』

くグレートIIブリッジ奪還作戦く

《ドオオオオオオン》

帝国軍の円形陣を連合が包囲している。
戦況は連合に芳しくない。

連合軍艦隊旗艦

くスヴァンフヴィートく艦橋。

総指揮官兼艦長リカード、作戦参謀長、艦橋乗組員、そして、何故かく紅き翼くが客分提督みたいな感じで居た。

リカード

「くくく！…厄介な要塞だぜ！」

ナギ

「ホント、流石に連合ご自慢だっただけの事はあるぜ！」

参謀長

「呑気に言わんで下さい！」

ナギ・リカード

「「ワリイな！」」

魂の波長が合っている2人。

アル

「フフ：しかし、包囲戦法では通用しませんね？」

参謀長

「：ぐ！：ならばどういう戦法を：？」

作戦を立案した参謀長。

涼子

「円形陣に対抗するには戦力集中の一点突破よね？」

アル

「そうです。」

参謀長

「がふっ！？」

詠春

「：ほう。」

ゼクト

「見事じゃ、涼子。」

ラカン

「こうゆう事は覚えんの早いな？」

涼子

「うっさい！」

リカード

「なるほどな。…頼めるか？」

ナギ

「俺達で風穴をあけろってか？
任せな！＜紅き翼＞行くぜ！！」

涼子・ラカン・詠春・アル・ゼクト

「「「「おうっ！！！」」」」」

先頭にラカンが、左翼に詠春が、右翼に涼子が、後衛にアルとゼクトが

ナギを中心に陣取る。

ラカン

「ハッ！先ずは俺様から行くぜ！
来たれ！！」

ラカンの＜千の顔を持つ英雄＞が槍となり投擲する。

《——ドゴオオオオオオオツ！！！！》

大爆発。

ナギ

「良い花火だったぜジャック!!
てめえら道を空けろ!! <紅き翼>のお通りだぜ!!」

参謀長

『……あ……あ……あわわ。』

リカード

『…全く、とんでもない奴らだぜ!』

紅き六枚の翼が戦場を翔け抜ける。

涼子

「行くわよ! 飛天御剣流<龍槌閃>!!」

魔法の木刀が敵を叩き落とす。

詠春

「――<百烈桜花斬>!!」

<夕風>が敵を斬り裂く。

涼子

「浮羽神風流<嵐>!!」

<風>の<神気>が敵を吹き飛ばす。

ラカン

「オラオラオラオラアアッ!!」

＜千の刃＞が敵を貫く。

涼子

「十六夜念法＜怒涛＞!!」

ネタ剣術其の三。

＜火＞と＜水＞の＜神気＞を合わせ
煮えたぎる水を敵に浴びせる。

アル

「：フフ、涼子さんは前回出番なしが
相当悔しかったみたいですね？」

ゼクト

「フム。ワシらも出番無しじゃったが？」

2人は、時には攻撃魔法で敵を撃ち、時には防御魔法で仲間を守る。

ナギ

「決めるぜ!!——＜千の雷＞!!!!」

＜雷＞が敵を消し飛ばした。

リカード

『今だ! 全艦＜紅き翼＞に続け!!』

リカード

「…すまん、ナギ。…俺の力不足だ。」

ナギ

「グレートブリッジを取り戻して、帝国と停戦条約を結ぶ筈だっただろ!？」

戦争を終わらす為に、難攻不落の要塞を陥落させた総指揮官の発言力を期待していたのだった。

アル

「…奪われたものを奪い返した。」

その自信が、このような結果を招いてしまった。…私達にも責任があります。」

ナギ

「ぐっ…!!」

リカード

「…ナギ…お前達に頼みがある。」

ナギ

「頼み？」

リカード

「入ってくれ。」

扉を開け、スーツのポケットに手を入れた一人のオッサ『居合い拳

！』ダンディーが入って来る。

ナギ

「誰だ？」

『はじめまして。俺は“元”政府情報部員＜ガトウ・カグラ・ヴァンテンバーク＞だ。』

リカード

「ガトウは俺の友人でな、超一流の情報部員だった男だ。」

ナギ

「んで、そのお前がどんな用なんだ？」

ガトウ

「…簡単に説明する。」

俺は、この戦争に不自然な部分を感じて調査をしていた。

：だが、連合政府から圧力がかかり中断させられてしまった。

連合政府に不信感を抱いた俺は、友人リカードに頼み

俺と同じ疑問を抱くお前達＜紅き翼＞に

会わせて貰おうと考えた訳だ。」

アル

「“同じ疑問”ですか、流石に超一流の情報部員。」

ナギ

「あ…えっと？…俺達に会ってどうする気だったんだ、ガトウ？」

ガトウ

「＜紅き翼＞の仲間になってくれないか？」

アル

「それが、リカードさんの頼みですか？」

リカード

「そうだ。」

ナギ

「…あんた強いかな？」

《パァン！》

ナギとガトウの間で何かが弾けた。

アル

「ほう。」

ナギ

「…面白い技を使うな？」

ガトウ

「＜居合い拳＞と言う。」

ナギ

「良いぜ！歓迎するぜ、ガトウ！！」

ガトウ

「…いや、実は俺だけじゃ無いんだ。
＜少年探偵団＞って弟子が居てな？
その子達も良いか？」

ナギ

「お前の弟子なら大丈夫そうだ！構わないぜ！！」

ガトウと少年探偵団が＜紅き翼＞の仲間になった。

第五話『黒い戦争』（後書き）

涼子

「銀英伝を知らないと分からない部分があったわね？」

作者

「知ってる人には分かりやすかろ？」

涼子

「どうだか？」

第六話『美少年で探偵でS』（前書き）

作者

「一週間程、熱出して寝込んでた。」

涼子

「季節の変わり目だしね。みんなも気をつけてね。」

作者

「皆様の応援が何よりの良薬にございます。」

第六話『美少年で探偵でS』

＜紅き翼＞とガトウ達との顔を合わせ。

『涼子さ～～～ん!!』

ガトウの連れて来た少年の一人が
笑顔で手を振りながら近づいて来た。
意外な人物の登場に目を見開く涼子。
現れたのは通称＜厚顔の美少年＞――

《ガバツ》

大作

「いやあ、お元気そうですね涼子さん？」

――＜神矢大作＞だった。

涼子

「ちょ：ちよっと、大作君!？」

何でこんなところに居るのよ!？」

てか、いきなり抱き付くなあ!!」

顔を真っ赤にして怒鳴る涼子から笑って離れる大作。

アル

「彼氏ですか、涼子さん？」

涼子

「違うわよ!!」

アル

「(ちよつとショックを受けてますねナギ?)」

ナギ

「(う…うるせえな!)」

念話で話すアルとナギ。

大作

「すいません、いきなり混乱させてしまいましたね。

皆さん、僕は涼子さんの知り合いで神矢大作です。

現在、ガトウさんの下で＜少年探偵団＞のリーダーをやっています。

」

涼子

「……あんたにピッタリだわ。」

ナギ

「大作って、本当にどんな奴なんだ?」

大作

「僕は涼子さんの追っかけですよ。

涼子さんを隠し撮りしたりしてます。」

涼子

「おい！」

アル

「涼子さんが十歳位の物は有りますか？」

アルが希望に満ちた顔で尋ねる。

大作

「……それは、残念ながら。」

悔しそうに呟く大作。

アル

「……そうですか。」

ガツクリとうなだれるアル。

涼子

「……あんたら、成敗するわよ？」

詠春

「……追っかけてレベルじゃ無い気がするな？」

大作

「ガトウさん、僕は涼子さんに話しが有るんで向こうに行ってます。」

ナギさん、涼子さんをお借りしますね。」

ガトウ

「うむ、分かった。」

ナギ

「お：おう。」

涼子と大作が席を外して――

ガトウ

「…カミヤは、優秀な諜報員なんだがな。——おっと、2人共挨拶しなさい。」

『僕は、タカミチです。宜しくお願いします。』

『クルトです。お願いします。』

空気のラカンとゼクトでした。



涼子

「…で、何であんたがこの世界に居るのよ？」

大作

「それは僕達も神様に、この世界へ送ってもらったからですよ。」

こっちに来た時期は、涼子さんが一人で

粹に暴れ回ってた頃です。」

涼子

「…僕“達”って事は、他にも誰かこっちに来てるの!？」

大作

「はい、もう一人だけ来てますよ。」

涼子

「それって、まさか？」

大作

「多分、涼子さんの想像通りの人物
＜草薙静馬＞さんですよ。」

涼子

「……………やっぱり。」

頭を抱える涼子。疑問を抱く。

涼子

「ん？　そういえば、何でアイツと一緒にじゃないの？」

大作

「どうやら、別々の場所に送られたみたいでして。
でもまあ、あの人ならあつという間に
この世界に馴染むと思いますよ。」

涼子

「……………確かにそうね。」

ところで、あんたは神様から何か能力を貰ったの？」

大作

「ええ、スパイ的な能力を幾つか頂きました。

詳しくは次のページで

この＜魔法世界＞に送られた様子と共に
教えます。」

涼子

「おいこら。」

大作

『ごめんくださーい。』

静馬

『邪魔すんでー。』

神様

『どうやって来た!?!?』

静馬

『そんな事はどーでもええやろ?』

俺らも＜魔法の国＞とか言うところ行かせろや?』

神様

『何故?』

静馬

『涼子がそっちに居んのやろ!?!?』

しかも怪獣やら魔法使いやらとガチバトルやろ!?!?』

そんなオモロい事、独り占めしようたってそうはいかへんぞ!!」

神様

『要は、色んな奴と喧嘩したいと?』

拒否るだけ時間の無駄だろうから行かせてやるか。』

静馬

『よっしゃい!』

大作

『やりましたね。』

神様

『んで、あんたら何か希望する能力は有りますかい?』

静馬

『そうやな、先ずは<不老>や!』

あのデカ女だけ年取らんのは許さへんで!』

次に、南雲のアホよりちよっと上の身体能力!!』

でもって<無限の神気>や!!』

ガス欠を気にせんで済むしな!』

神様

『<神気>の属性は増やすか?』

静馬

『要らん要らん!』

俺の<火>だけで充分や!』

神様

『了解。武器は？』

静馬

『特には必要あらへんな。』

神様

『他には何か？』

静馬

『俺はもう充分や！』

神様

『じゃあ次は大作か、どんな能力を望む？』

大作

『とりあえず僕も＜不老＞を貰います。』

それと自由に性転換で＜矢神花子＞になれるようにして下さい』

神様

『あいよ。相方は性転換能力要るか？』

大作

『ついでに貰ったときましようよ？』

そして＜草薙静“鹿”＞になって下さい。』

静馬

『要らんわ！』

神様

『さよけ。』

大作、お前の身体能力は＜ケイン・バーネット＞級にしとく。』

大作

『傍迷惑なメリケン忍者級ですか。
文句は有りませんが。』

神様

『気や魔力はどうする？』

静馬

『俺みたいにしとくか？』

大作

『僕は表立って荒事に参加しませんから
人並みで良いですよ。』

神様

『あいあい。』

それでも、お前らも涼子も鍛えりゃあ能力上がるけどな。』

大作

『後は、潜入アイテムが欲しいですね。』

神様

『それなら、お前らで＜仮契約＞すれば良いさ。』

大作

『分かりました。静馬さん目を閉じて下さい。』

静馬

『ちょっと待てや！俺らでチューしろ言うんか！？』

神様

『嫌か？』

大作

『……やらないですか？』

静馬

『キモい冗談はやめんかい！』

男同士でキスする気なんぞ無いわ！』

神様

『大作が性転換能力使えばいいんじゃない？』

大作

『ああ、なる程。』

静馬

『違うやり方にせいや！？』

神様

『しゃーねーな！』

お前ら、E・Tトモダチって感じで人差し指を合わせれ。』

大作

『それで良いんですか？』

神様

『大丈夫だ。』

他には、ミ〇ミ〇の回し飲みとかでも。』

静馬

『なめとんのか!?!?』

仮契約完了

仮契約者…神矢大作

主人…草薙静馬

アーティファクト…＜堅固なる蛇＞

上から被る事により、認識阻害、対物理、対魔法の効果を得るダンボール

神様

「良し、もう逝くか？」

大作

「そうですね。」

逝きましょう、静馬さん。」

静馬

「字いっちゃうんじゃないか？」

大作

「テンプレというやつですよ。」

静馬

「ああ、これがほうか。」

神様

『うるせえや！＜魔劍・七星刃＞！！！
サッサと逝け！』

マンダラ・ドライブ
＜次元潮流＞！！

静馬

『く穴とちやうんかい!？』

神様

『テンプレばかりちゃうわ!!』



大作

「——とまあ、こんな感じで此方に来たんですよ。そして、色々な犯罪組織の情報を入手してガトウさんに近付きました。

その後、

保護した戦災孤児のタカミチ君やクルト君にスパイ技術を教えながら、ガトウさんの部下として働いていたんですよ。」

涼子

「……頭が痛いわ。」

第六話『美少年で探偵でS』 (後書き)

涼子

「もっと戦いたいんだけど？」

作者

「今は戦力準備段階です。」

涼子

「前回を見てもわかるように
戦闘場面が下手だったから
逃げている訳じゃないのね？」

作者

「逃げてません。」

後ろに向かって前進です。

まあ一応次回は戦闘シーンが
有る(はず)！

お前以外の奴が！！」

涼子

マンガラ・ドライブ
「次元潮流！！」

第七話『炎の男』（前書き）

作者

「……大阪弁が難しいわ。」

涼子

「……出番が欲しいわ。」

第七話『炎の男』

森林の中、人形を連れた金髪の少女と黒ローブ姿の四人の男が向かい合っていた。男の一人が声を上げる。

男A

『見つけたぞ、吸血鬼!』

少女

『…ふん、見つけたから何だと?』

男A

『知れた事!!』

邪悪な吸血鬼に正義の鉄槌を下す!!』

少女

『……身の程知らずが!!』

少女の名はくエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。賞金額600万ドルの悪の魔法使いにしてく闇の福音などとも呼ばれる不死の吸血鬼。

男達は正義を掲げるく立派な魔法使い。

男A

「やるぞ、お前達!!」

男B・C・D

「「「応!!」」」

男達は杖を持って構える

闇夜の森に惨劇が始ま――

『だらっしやああああ!!』

《ドガッ!》

男A

「あぐわっ!?!」

男B・C・D

「「「リーダー!?!」」」

何者かが横から男Aを飛び蹴りで吹っ飛ばし
エヴァの前に、守るように着地する。

エヴァ

「へ?」

『おどれら! 女の子相手に何しとんねん!!』

叫んだのは、野性的ながら端正な顔立ち

。長身で均整のとれた赤銅色の肌に赤いTシャツを着。

黒いカンフーズボンとスニーカーを履き。

額に虎縞のバンダナを巻いた高校生位の少年。

男A

「……………ぎ…貴様、何者だ!?!」

よろけながら立ち上がる男A。

『俺の名前か？

耳の穴かっぽじって聞けや?』

少年は体に炎を纏わせる。

エヴァ

「(…な…なんだ、この膨大な気は!?!)」

動揺するエヴァ。

男達も同様に動揺している。

エヴァ

「(え? ダジャレ?)」

違います。

静馬

「俺の名前は<草薙静馬>!!」

人呼んで<炎の男>や!?!」

名乗ると同時に、今度は男Bに向かって
間合いを一瞬で詰め寄り炎の拳を撃つ。

静馬

「＜赤い牙＞!！」

男B

「うわらば!？」

炎の拳が顎をとらえ、ノックアウトさせる。

男C・D

「「男B!？」」

男A

「：俺達には名前が無いのか？」

静馬

「嬢ちゃんは俺が守ったるから心配すんな！」

エヴァに向けてニッと笑う静馬。

エヴァ

「!？」

顔が赤くなるエヴァ。

男A

「貴様、その女は吸血鬼なんだぞ!!
それでも味方する気か!？」

静馬

「男が女を守んのは当たり前やろ!!
吸血鬼とかそんな事どうでも良えわ!!」

男A

「な!?!? ふざけるな!?!」

静馬

「俺は本気や!!」

エヴァ

「……はう。」

更に顔が赤くなるエヴァ。

男C

「＜流水の縛り手＞!!」

どうやら詠唱していたらしい男Cの
水の魔法が静馬に襲いかかる。

静馬

「はっ! 火には水ってか!?!?
甘いわ! <炎の虎>!!」

炎の拳が水を薙払い完全に蒸発させた。

男C

「何だと!?!」

《シュッ》

静馬は男Cに向かって低く鋭く跳躍した。

静馬

「＜猛虎散弾脚＞！！」

《ドガガガガガ》

男C

「ぶるううううあ！？」

相手の体を駆け上がる様な連続蹴りで

男Cは戦闘不能になった。

エヴァ

「！！」

男D

「＜魔弾の射手・砂の7矢＞！！」

エヴァ

「＜氷楯＞！！」

《パキキキン》

着地の瞬間を狙い、男Dが静馬の背後に回り込み無詠唱で撃った魔法の矢を、エヴァが間に入り防いだ。

静馬

「嬢ちゃん、サンキューや!！」

《ダン》

エヴァ

「べ…別に…って、うお!？」

静馬は礼を言うと、エヴァの頭上を飛び越えながら前方に宙返りし。

静馬

「チエストオオオ!！」

《ドゴオオオン》

男D

「くぎゅっ!？」

男Dの頭に、炎のかかと落としが炸裂し
マットに……もとい、地に沈めた。

静馬は男Aに目を向ける

静馬

「お前で最後や!かかって来いや!
とっくに、さっきの蹴りのダメージ
回復しとんのやろ!？」
動かずにいたんわ、こっちの手の内

見るためか!?!」

男A

「…気付いていたのか?」

エヴァ

「……仲間を捨て駒にしたか。屑だな。」

男A

「何だと!?! 吸血鬼如きが!?!」

エヴァ

「…フン。」

静馬

「俺も、その可愛い嬢ちゃんと同じ意見やで!?!」

エヴァは、顔を赤くして無言で俯いた。

男A

「ぬかせ!?!」

男Aは、浮遊術で空中に立つ。

男A

「小僧、貴様は空を飛べるか?」

静馬

「さあどうやらな?」

男A

「飛べない様だな？」

嘲笑い、空中で魔法の詠唱をする。

エヴァ

「…私を忘れてないか？奴は私が――。」

静馬

「心配あらへん！俺に任せとけ！」

男A

「＜雷の暴風＞！！」

静馬

「俺は飛べんとは言うてへん！！」

静馬の纏う炎が鳳凰の姿をなし
嵐の魔法を突き破り飛翔する。

男A

「何い！？」

静馬

「爆炎奥義＜火の鳥＞！！」

鳳凰が男Aに体当たりをする。

男A

「ぐっはあああああ！？」

男A達は全滅した。

静馬

「どんなもんじゃい!!」

静馬

「嬢ちゃん、怪我無いか？」

エヴァ

「…アだ。」

静馬

「うん？何や？」

エヴァ

「エヴァだ!! 私の名は、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル!!」

嬢ちゃんではなく、私の事はエヴァと呼べ!!」

静馬

「ほうか？分かった。」

エヴァ、俺の事は静馬で良え。

んで、エヴァは怪我しとらんか？」

エヴァに近寄り頭を撫でる。

エヴァ

「ふあ！？…あ…怪我なら無いぞ？
助かった。…あ…ありがとう…シズマ。」

『ケケケ、随分ト素直ジャネエカ？』

エヴァ

「う…煩いぞ！」

静馬

「うん？今喋ったん誰や？」

『俺ダヨ、俺。』

人形が静馬に近寄り話し掛ける。

静馬

「何や、お前？オレオレ詐欺か？」

『誰ガヤネン。』

人形の手がビシッとツツコミを入れる。

静馬

「良えツツコミやで、お人形ちゃん！」

エヴァ

「…つまらん漫才はやめろ。」

そいつは、私の従者のチャチャゼロだ。」

チャチャゼロ

「ケケケ、才後ガ宜シイヨウデ。」

静馬

「ほな、サイナラ！」

エヴァ

「待たんか！」

シズマ、お前は何者だ？ お笑い芸人か？」

静馬

「それでも構へんけどな？」

まあ、俺は通りすがりの＜喧嘩の伝道師＞や！」

エヴァ

「…何だそれは？」

静馬

「世の中に＜正しい喧嘩＞を教えるんが俺の役目や！！！」

チャチャゼロ

「ナカナカ、イカシタ職種ジャネエカ？」

静馬

「せやろ！？」

でな、今度は＜魔法世界＞っちゅう所に
正しい喧嘩のやり方を伝えに行ったら
思っとんのや！！！」

エヴァ

「＜魔法世界＞だと!？」

チャチャゼロ

「ケケ、面白ソウダナ？」

静馬

「けど、行き方が分からん！」

堂々と胸を張り言い切る静馬と、こけるエヴァ。

静馬

「ちゅうワケやから、エヴァかチャチャゼロ、知っとったたら教えてくれへんか？」

エヴァ

「だ…だったら、私が連れて行ってやるぞ！」

静馬

「ホンマか、エヴァ!?! 助かるわ!！」

チャチャゼロ

「オイ、御主人ハ賞金首ダロ？」

ソナ所ニ行ケバ余計ニ狙ワレンジヤネエカ？

テカ、入国スラ出来ルノカ？」

エヴァ

「あ。」

静馬

「それやと、あかんがな？」

エ
ヴ
ア

「い：いや、

変装でもすれば問題ないぞ！！

この小説は、

「御都合主義で出来ているからな！！」

チヤチヤゼロ

「……御主人、本当二大丈夫力？」



魔法世界

大丈夫でした。

チャチャゼロ

「……何デヤネン？」

「本當ニ御都合主義ダナ？」

第七話『炎の男』（後書き）

静馬

「もっと俺の戦いを上手く書けや！」

エヴァ

「何、贅沢を言っている！？

私など楯になっただけではないか！」

チャチャゼロ

「俺ナンカ、戦闘シテネエゾ！！」

第八話『princess』（前書き）

作者

「PVが10000を越え、ユニークが2000を越えた！」

涼子

「ポイントは、動かざること山の如し、だけどね。」

作者

「何故？」

涼子

「あんたの文章が下手だから！」

第八話『princess』

くグレートブリッジく

大作

「大変ですぜ、旦那！」

岡っ引きっぽい姿の大作が
浪人姿の涼子に話し掛ける。

涼子

「どうした、大作？」

大作

「この戦争を裏で操ってる連中について
分かったんでさあ！」

何でもく完全なる世界へって秘密結社で
連合・帝国の中枢にまで
入り込んでるって話しですぜ！」

涼子

「何と!！」

タカミチ

「……あのう、2人共、何をやってるんですか？」

涼子・大作

『時代劇ごっこ。』

呆れ顔で尋ねるタカミチに、あっけらかんと答える。

クルト

「何を考えているんですか!?!」

生真面目な、クルトは怒っている。

詠春

「その通りだ、2人共!?!」

クルト

「ビシッとお願ひします、師匠!?!」

クルトは、詠春に剣を教わっている。

詠春

「其処は、文を結んだ風車を投げるべきだ!?!」

涼子・大作

『なる程!?!』

ずっとこけるクルト。

タカミチ

「……………ハハハ。」

乾いた笑い。

ガトウ

「……調査結果は、カミヤの言った通りだ。それでな、要件が有るから一緒に来てくれ。」

＜紅き翼＞ガトウに連れられて移動。

くメガロメセンブリア本国く

ナギ

「何だよガトウ、わざわざ本国首都まで呼び出してさ？」

涼子

「誰か会わせたい人でも居るの？」

ガトウ

「その通り。協力者だ。」

ナギ

「協力者？」

『そうだ。』

1人の老人が、会話に入り込んで来た。

詠春

「マクギル元老院議員！」

涼子

「ガトウの会わせたい人ってその人？」

マクギル

「いやわしちゃう。」

大作

「主賓は、こちらの御方です。」

大作がエスコートして、ローブ姿の女性が近づいて来る。

女性は、立ち止まると

右足を前に中腰になり

手のひらを上に向けた右手を

下方に差し出して、恥ずかしそうに

『お控えなすって。』

仁義を切った。

紅き翼一同がずっこける。

紅き翼一同

『はあ？』

女性は、構わず続ける。

『手前しがない王女にござんす。

手前生国発します所、ウェスペルタティア王国。名をアリカと申しやす。』

涼子

「…ご…御丁寧な御挨拶、ありがとうございます。」

涼子が仁義を返した。

他は笑いをこらえて痙攣している。

アリカ

「む、何がおかしい？」

涼子

「王女様、その挨拶は誰に教わりました？」

アリカ

「大作だが？」

涼子

「……大作君？」

涼子が大作を睨み付ける。

大作

「あはは、すいません、アリカ王女。」

アリカ

「…どういう事だ？」

アレが旧世界は日本の挨拶と聞いたのだが私を騙したのか？」

アリカも大作を睨む。

大作

「旧世界の日本の挨拶というのは本当です。嘘はついていません。」

涼子

「：確かにその辺は間違っていないけど一般的じゃないわ。一部だけよ。少なくとも、王族がする挨拶じゃないわね。」

アリカ

「なん：だと？」

恥ずかしさのあまりガックリと膝をつく。

涼子

「元気出して下さい王女様。」

アリカに手を差し伸べる。

アリカ

「：すまぬ。主の名は？」

涼子

「御剣涼子。」

アリカ

「主が＜サムライガール＞か。私の事は、アリカで良い。」

涼子

「宜しく、アリカ。」

さっきの呼び方はやめてね？

私の事は涼子でね？」

アリカ

「うむ。宜しくじゃ、涼子よ。」

ラカンが近づいて話し掛けて来た。

ラカン

「俺は、ジャック・ラカンだ。
お控えなすって。」

《すこーん》

ラカン

「けぺ！」

アリカ

「気安く話し掛けるな下衆が。」

涼子が木刀で突っ込み、アリカが悪態をつく。

アル

「あの2人、気があってますね。」

ゼクト

「類が友を呼んだんじゃろう。」

詠春

「確かに、どこか似た感じがするな。」

詠春

「どうしたナギ、ポケットとして？」

ナギ

「…ん？」

あ…いや…何でもねえ。」

アリカ

「ナギだと？」

主がく千の呪文の男＞か？」

ナギ

「そうだ。」

…えくと、オスティアってと、アスナの？」

アリカ

「……＜黄昏の姫御子＞については、話せぬ。……………すまぬ。」

ナギ

「そ…そうか。」

ゼクト

「ふむ。では、後は若い2人に任せて。」

マクギル

「年寄りは退散するとしましょう。」

ナギ・アリカ

『お見合いか!!』

涼子

「そうなんじゃない？」

アル

「ゆっくり楽しくお話ししなさいナギ。」

ナギ

「え……おい？」

アリカ

「ま……待て。」

《ぞろぞろ》

ナギ

「……マジでみんな退散しやがった。」

アリカ

「……し……仕方ない。」

とりあえず、話さぬか？」

ナギ

「そ……そうだな。」



涼子

第八話『princess』（後書き）

涼子

「アリカにあんな真似させて良いの？」

作者

「原作破壊って入れているし、良いんじゃない？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5641n/>

魔法のサムライガール

2010年10月17日13時02分発行